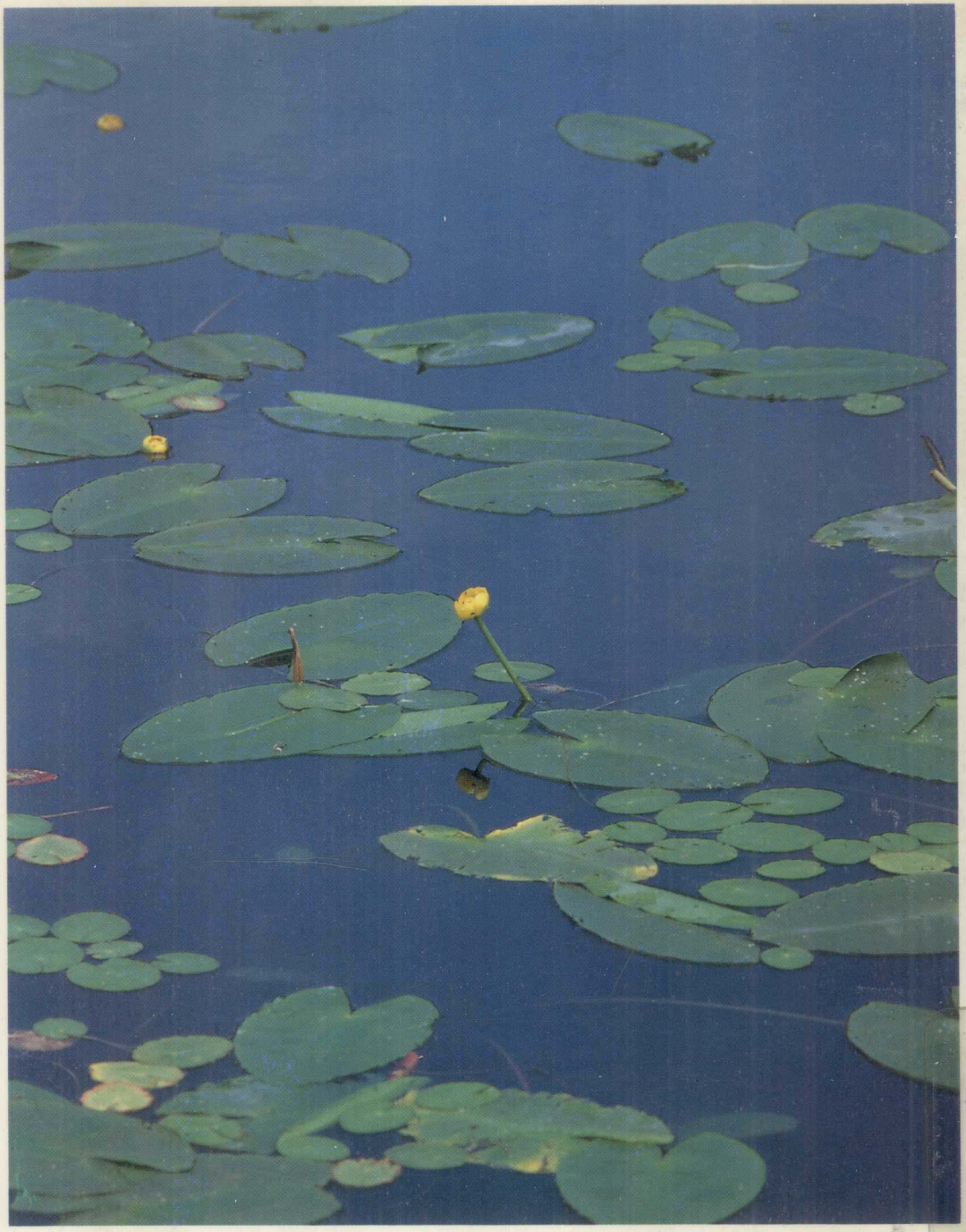
季寄せ―草木花

夏〔下〕

選・監修　中村草田男
写　真　冨成忠夫
解　説　本田正次



0392—258047—0042

季寄せ——草木花〔夏・下〕

朝日新聞社編

定価　一八〇〇円

発行　昭和五十五年五月一日第一刷

発行者　朝日新聞社　波多野公介

発行所　東京　名古屋　大阪　北九州　朝日新聞社

印刷所　凸版印刷株式会社

©朝日新聞社一九八〇

季寄せ―草木花

選・監修 中村草田男／写真 冨成忠夫／解説 本田正次

朝日新聞社

なつい

選・監修　中村草田男
写　真　冨成忠夫
解　説　本田正次
植物画　佐藤達夫
例句選　雨宮昌吉
　　岡田海市
　　北野民夫
　　香西照雄
　　貞弘　衛
　　宮脇白夜

装　幀
レイアウト　多川精一
題　字　川口芝香

春〔上〕

春〔下〕

夏〔上〕

夏〔下〕

秋〔上〕

秋〔下〕

冬

お読みになる前に

●このシリーズは、七巻（秋上・下・冬・春上・下・夏上・下）で構成しており、この巻は夏の下です。

●夏は立夏（五月五日ごろ）から立秋（八月八日ごろ）まで。季節のわけ方は従来の歳時記に準拠し、開花の時期などが大幅に違うものは解説にそれを説明しました。

●季語は草、木、花に限定しましたが、一部なじみの深い菌、藻も植物季語として含まれています。

●季語の配列は、東京を中心に花や実を見るのが早い順とし、たとえば季節中咲いている花などはその咲き始めの時期をとり、本田先生に配列していただきました。

●季語は俳句でよく知られているものを主見出しとし、別名、異名、方言名、古名などを併記しました。見出し季語の右側に現代がな、左側に旧かなをつけ、別名などは現代がなに統一しました。

●例句は原作通りとし、かなづかいは原作に従いました。漢字は原則として新字体とし、新字体のないものは旧字体にしました。

●例句のルビは、原作についているものはそのまま生かしました。読みやすくするために編集部でつけたものもあります。

●解説は植物の標準和名に統一しました。季語と植物解説との見出しが一致しないのは、解説は正しい植物名で、季語は俳句でよく使用されている呼び名を優先的に採用したためです。

●植物名の漢字は論議の多いところですが、できるだけ漢字で表記し、従来よく使用されているものの、明らかに間違っているものは除外しました。

●例句は季語にふさわしい句を収集、選句したものをもとに、各巻の監修選者がさらに編集に合わせて選びました。

●例句は古典は名（号）だけ、現代俳句は姓名とし、配列は、原則として古典を先にしましたが、必ずしも年代順ではありません。

●季語索引には夏上と夏下とを合わせ夏全体の季語をのせました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

薄雪草／9
岩鏡／9
岩桔梗／10
駒草／11
鈴蘭／12
九輪草／12
敦盛草／14
螢袋／14
虎耳草／16
葎／17
月見草／19
烏瓜の花／20
藜／21
姫女苑／22
豆の花／22
麒麟草／24
都草／25
虎杖の花／26
蕗／26
擬宝珠／28
木天蓼の花／29
浜昼顔／30
浜豌豆／32
除虫菊／33
ジギタリス／34
紅の花／35
百合の花／36
石斛の花／38
風蘭／39
ユッカ／40
アマリリス／41
葵／42
茄子の花／44
鬼灯の花／45
馬鈴薯の花／46
胡蘿蔔の花／47
山桜桃の実／49
枇杷／49
桜桃の実／50
桜の実／51
青梅／52
楊梅／53
バナナ／54
桑の実／54
麦／56
木央柳／57
黴／58
青葡萄／60
杏子／61
李／62
木苺／63
百日紅／65
しもつけ／65
石楠花／66
泰山木の花／68
夾竹桃／68
鷺草／70
柳蘭／70
蛇の髯の花／72
捩花／73
射干／74
虎尾草／75
萱草の花／76
竹煮草／76
夕菅／78
げんのしょうこ／79
蚊帳吊草／80
灸花／81
布袋草／82
浜木綿／82
麻／84
独活の花／85
トマト／86
胡瓜／87
胡麻の花／88
夕顔／88

蓮／90
縷紅草／92
松葉牡丹／93
ダリア／94
向日葵／94
孔雀草／96
仙人掌の花／97
凌霄花／99
花魁草／100
キャベツ／100
木下闇／102
緑蔭／104
夏木立／105
茂／106
草いきれ／107
万緑／108
韮の花／109
茗荷の子／109
木耳／109
青柚／110
青林檎／110
青胡桃／110
鋸草／111
夏薊／111
絹糸草／111
綿の花／112
土用芽／112
蝦夷菊／112
含羞草／113
日日草／113
百日草／113
夏菊／114
夏萩／114
茄子／114
瓜／115
甜瓜／115
メロン／115
帚木／116
紫蘇／116
新馬鈴薯／116
昆布／117
黄蜀葵／117
紅蜀葵／117
青鬼灯／118
青柿／118
瓢の花／118
花前線＝サルスベリ——大後美保／6
コヒルガオ——佐藤達夫・画／119
野の花に思う——入江相政／120
神秘的で妖艶なノリウツギ——川添登／125
「季寄せ」撮影雑記——冨成忠夫／130
俳句と植物学と——本田正次／134
有益だった植物学的検証——北野民夫／137
索引／139
編集ノート／143

目次カット（ムラサキツユクサ）・小原雅子

花前線

8月25日
8月20日
8月15日
8月10日
8月25日
8月20日
8月15日
8月15日
8月10日
8月5日
7月31日

サルスベリ

サルスベリには白花もあるが、季節感としては、赤花のほうが好ましい。サルスベリを百日紅とも呼ぶように花期が長い。東京・保谷市で、一九七七年に開花状況を詳しく調べた結果では、開花始めが七月十五日で、この年は九月二十五日まで花が見られ、七十一日間も咲き続けていたが、盛花期はそのうちの七月二十日から八月十五日の二十五日間であった。なお図に示した盛花期の期日は、だいたい盛花期の中日に当る日である。もっとも、盛花期間の中でもとくに美しいのは、その前半期である。

淡紅色の花のサルスベリの花言葉は雄弁となっているが、夏の炎熱下に長い間私たちを楽しませ、いくらか暑さをいやしてくれる。

薄雪草（うすゆきそう）

エーデルワイス（うすゆきさう）

エーデルワイス咲き散るここが分水嶺　吉田北舟子

薄雪草利尻見えねば影淡し　沢田緑生

岩鏡（いわかがみ）

岩鏡咲きかぶさりし清水かな　中村素山

岩鏡山雨に男濡れて黒し　村越化石

岩かがみ雪解千筋の簾なす　篠田悌二郎

岩かがみ雲のぼりきて岳つつむ　甲賀山村

〔ウスユキソウ〕

本州、四国、九州の山地の日当たりのよい草原や乾いた礫地（れきち）、岩の割れ目などに生えるキク科の多年草で、高さ三十センチ前後になる。細長い葉を互生し、上面は緑色だが、下面は白い綿毛でおおわれている。名はこの綿毛を薄雪に見たてたものである。七、八月ごろ茎の上部に小さな頭花が集まってつくが、それをとりまく白い葉のほうがかえって花のように見える。同じ仲間に東北地方の高山に見られるミヤマウスユキソウ、早池峰（はやちね）山に特産するハヤチネウスユキソウ、尾瀬の至仏山や谷川岳特産のホソバヒナウスユキソウ、木曽駒ケ岳山頂付近にだけ野生するヒメウスユキソウなどがある。ミヤマウスユキソウとヒメウスユキソウは、間違って俗にエーデルワイスといわれるが、アルプスの名花といわれる本物のエーデルワイスは、ヨーロッパアルプスの特産であって、日本には野生がない。写真はホソバヒナウスユキソウ。

〔イワカガミ〕

高山植物というほどではないが、北海道から九州にかけての山の岩場に野生し、葉が堅くて、その表面が鏡のように光っているというので、この名がついた。イワとはいいながら尾瀬のような湿原にも多い。イワウメ科の常緑多年草で、縁に鋸歯がある丸っこい葉が根ぎわに集まり、ふつうは濃い緑色をしているが、ときに朱色であったり、黒ずんだ紫色に変わっていることもあり、モザイクのような葉を見るだけでも楽しい。初夏のころ高さ十センチぐらいの花茎の先に、数個の美しい淡紅色の花が集まって開く。花冠のもとは筒状だが、先は五裂し、裂片はさらに細く裂けている。日本海側の山地では、かなり低い場所にもオオイワカガミという大形の変種があり、イワカガミとともに白花の品種もある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

岩桔梗（いわぎきょう）

（いはぎきやう）

岩桔梗紫消えてなほ夕焼　福田蓼汀

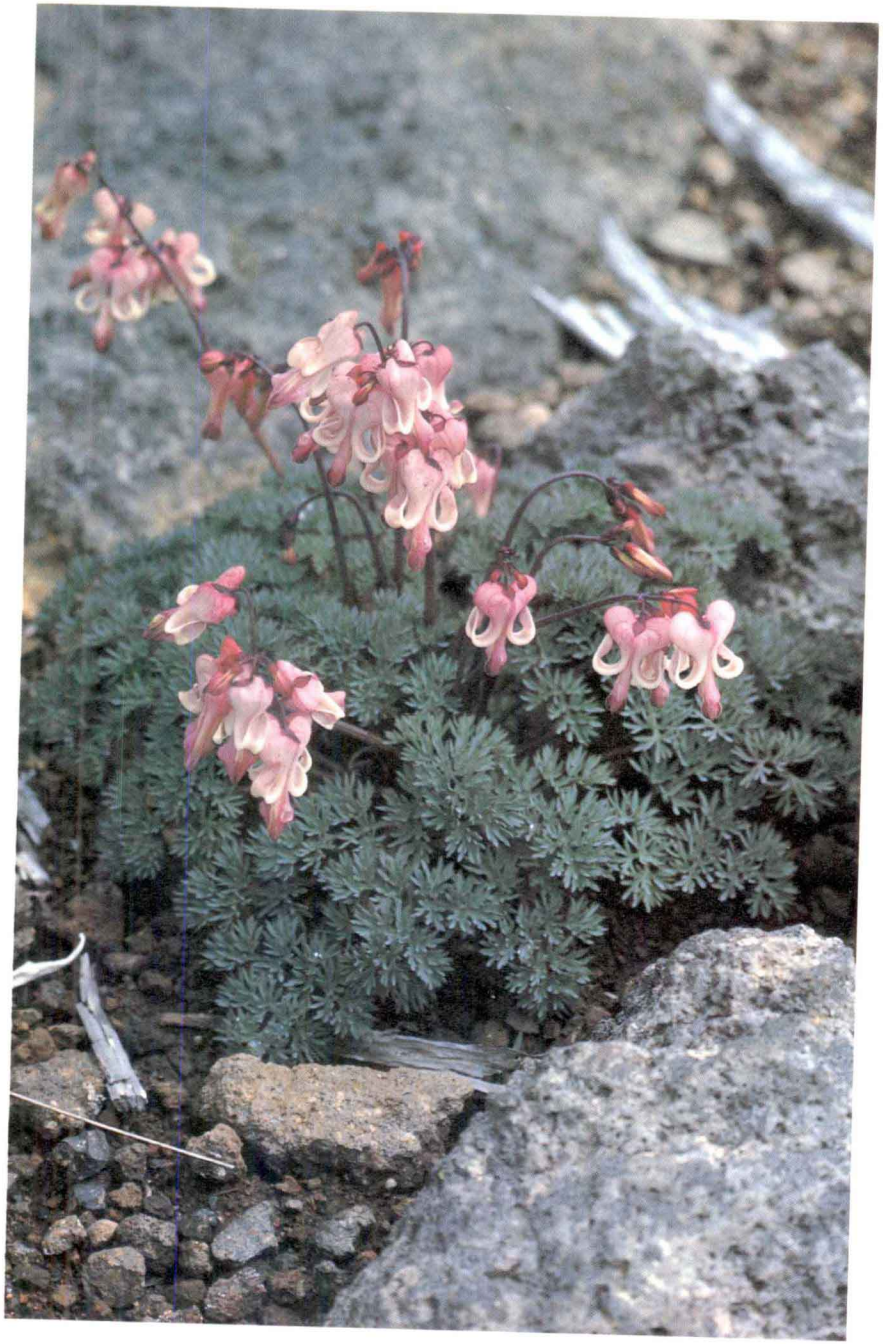
岩桔梗路傍供養の石積めり　篠田麦子

揺れ合へり霧透す日の岩桔梗　岡田貞峰

岩桔梗落石雲にひびき絶ゆ　太田蓁樹

〔イワギキョウ〕

本州の中部地方以北、北海道の高山の砂礫地や岩の割れ目などに生えるキキョウ科の小さな多年草で、高さは十センチ前後である。鋸歯がある狭い葉を互生し、八月ごろ美しい紫色の花を茎の先に一個、まれに二、三個横向きにつける。広い鐘形をして五裂した花は、直径約二・五センチで、茎や葉の割には大きく見え、岩尾根を越えて吹き渡る高嶺の風に揺れ動いているさまは、いかにも高山植物らしい風情である。よく似たチシマギキョウは、同じような環境に生えているが、花の内面に白い毛があるので区別できる。



駒草（こまくさ）

駒草に石なだれ山匂ひ立つ　河東碧梧桐

駒草に霧闢（ひら）けゆくひびきあり　岡田貞峰

駒草や寝袋を干す日の出前　渡辺立男

駒草や朝しばらくは尾根はれて　望月たかし

駒草の花影そろふ日の出かな　藤田東涯

〔コマクサ〕

日本の高山植物の女王といわれ、ヨーロッパアルプスのエーデルワイス同様、高山の象徴的存在となっている。北海道から本州の中、北部の高山の裸地だけに生える、分布の限られた貴重な植物で、富士山にもない。それだけにオコマグサと敬称し、木曽御岳では「霊草おこまぐさ」と称して、御岳神社の参詣者に授けられたこともある。古くは健胃、鎮痛の薬草として用いられた。高さ十センチ前後のケシ科の多年草で、七、八月ごろ咲く美しいピンク色の花は、まことに気高く可憐である。ときに白花品も見られる。

鈴蘭（すずらん）

君影草（きみかげそう）

鈴蘭の卓や大きな皿に菓子　高浜虚子

鈴蘭の葉をぬけて来し花あはれ　高野素十

鈴蘭に憩ふをとめ等の肩見ゆる　水原秋桜子

鈴蘭や天使燭光に仮寝して　宮脇白夜

九輪草（くりんそう）

九輪草（くりんさう）

九輪草四五りん草で仕廻（しま）ひけり　一茶

牛去りし泉に赤し九輪草　相馬遷子

〔スズラン〕

北海道、本州、九州の山腹や高原などの日当たりのよい草原に、群落をなして野生するユリ科の多年草である。鈴蘭とはいってもラン科ではない。北海道では郷土の花に選ばれている。晩春から初夏にかけて長楕円形の葉を二、三枚広げ、葉陰に隠れるようにして短い花茎を出し、風鈴のような形の可憐な白い花をいくつも下向きに開くので、キミカゲソウという別名もある。君影草の意味である。花に芳香があり、山草として親しまれているが、毒があるので気をつけねばならない。しかし根と根茎は強心剤、利尿剤として用いる。庭に植えたり、切り花にされるものは、ヨーロッパ産のドイツスズランのほうが多く、栽培も容易で花も大きく香りも強い。文学作品で「谷間の姫百合」と呼ばれるのは、こちらのほうらしい。

〔クリンソウ〕

サクラソウ科の多年草で、日本産のサクラソウの仲間では最も大きく立派である。外国の学者が「サクラソウの女王」といったのもうなずける。日本の特産で、四国を除き北海道から九州までの山間の湿地、渓谷、原野の低湿地に群落をつくって野生している。葉が広くて大きく、根もとに集まっている。五月から七月ごろまで、葉の間から六十センチぐらいの長くて太い花茎を直立し、何段かの層をなして節ごとに直径二センチぐらいの紅紫色の美しい花を輪生して開く。花は裂片に丸みがあり、先がいくらかへこんでいて、七段、八段、あるいはそれ以上に重なって、輪生して開く様子を見たてて、クリンソウの名がついた。九輪草の意味である。早くから園芸植物として喜ばれ、花色も白や淡紅色その他があり、庭園の池畔や流れに沿ったところに植えられることが多い。

敦盛草（あつもりそう）

敦盛草（あつもりさう）の母衣も夕焼く雲の頭も　野沢節子

螢袋（ほたるぶくろ）

釣鐘草（つりがねそう）　提灯花（ちやうちんばな）　風鈴草（ふうりんそう）

峡に入る茶毗所そこにもつりがね草　及川貞

宵月を螢袋の花で指す　中村草田男

ほたる袋ゴンドラ影を提げてゆく　大石夏子

〔アツモリソウ〕

日本特産の野生ランの中では逸品である。北海道から本州中部の山地で見られるラン科の多年草で、高さ三十から五十センチぐらい。広い楕円形で、先の尖った葉を互生し、五月から七月にかけて、茎頂に大きな一花を開く。花は美しい淡紅色、長卵形で長く尖った側弁にかかえられるようにして、丸くふくれた袋状の唇弁が下がり、その上面に口が開いている。この唇弁のふくらんだ形を源平の一ノ谷の戦に出陣した平敦盛が背負ったという母衣（ほろ）に見たてた名である。唇弁の長さは四、五センチで、濃い紅色の網目模様がある。長野県には袋状の花の形からきたシシノフグリ、フグリバナ、ヨメノデンブクロ、キンタマソウなどといった方言がある。花の形がそっくりの同属のクマガイソウ（熊谷草）は、アツモリソウと対立させた名である。

〔ホタルブクロ〕

山野の道端近くなどに野生するキキョウ科の多年草で、高さは三十から七十センチぐらい。ほとんど日本全土に分布する。長い卵形の葉が互生し、縁には鋸歯があり、茎にも葉にも毛が多い。初夏のころ少し汚れたような淡紫色または淡紅色、ときに白に近い釣鐘形の花が幾つも、提灯をぶら下げたように咲いている。花の内面には紫色の斑点が、そばかすのように散らばっている。田舎の子どもが、ホタルを捕まえてはこの袋のような花の中に入れて持ち帰ったというので、この名がついたというが、いまでは全国的に少なくなったホタルをしのんで、ホタルブクロの花もきっと身の無聊（ぶりょう）をかこっていることだろう。花の形が提灯に似ているから、火垂袋だという説もある。またツリガネソウ、チョウチンバナ、フウリンソウの方言もあるが、他の植物にも同じ名があるから注意したい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com